

## 学生たちの感想文から

学生たちは毎晩、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第19回訪日の記録とした。以下、その一部を紹介する。

日付：11月29日（火）1日目

大学名：北京師範大学

氏名：賀婷雅

訪日初日、私は今回の活動にとっても良い印象が得られ、今後数日の活動が楽しみになった。

飛行機への搭乗時に見た横断幕とその標語は、温かみと安心を感じさせるものであった。

JALのサービスの質と設備について直接的な体験をした後、私たちはJALの整備工場を訪れた。こうすることで訪問自体への興味がより高まり、同社についてより良く理解できるのである。フライトアテンダントのアナウンスや会釈、変わらない笑顔そして優しい話し方から、JAL整備工場のスタッフの真剣な表情と工場内の大きな時計、そして「生命を大切にする」、「時間を大切にする」の文字は人々の日本航空への信頼を高めるものであった。

良い評判と人々からの信頼は、自らの努力で勝ち得るものであり、客が与えるものではない。長い間の継続、たゆまぬ態度、責任感以外にも、細部へのこだわりが感動と安心をもたらしている。それはこの「走近日企・感受日本」事業のように、たとえ何度も行っても、緊張感を失うことなく、また単純な「流れ作業」にならず、従来通りに誠心誠意行われている。これは本当に素晴らしい精神で、とても感動そして感謝をしている。

日付：11月29日（火）1日目

大学名：北京理工大学

氏名：王韞

今日は訪日の初日で、朝早く空港に集合し、様々な検査を経た後日本へ向かう飛行機に搭乗した。引率の先生やガイドさんはとても気配りが行き届いていた。

羽田空港に到着した私たちはまずJALの整備工場を見学した。そこではまず日本航空についての紹介があった。同社は長い歴史があり、現在では整ったシステムを有し、国内外における巨大な輸送処理量を担っている。紹介の後、私たちは工場内部においてJALの運営状況を間近で体感した。工場内には飛行機が数機停泊し、多くの作業台があり、数名の制服姿のスタッフが忙しそうに作業をしていた。紹介によると、工場内には1980年代の飛行機が収蔵されており、かつて日中国交正常化やジャイアントパンダ来日などの歴史的イベントに関わったとのことである。この他日本航空での運航を終えた多くの飛行機は、タイやアフリカなどの発展途上国向けに売却され、現地で活躍を続けている。

JALの見学において私は、一企業の実力はその技術力が大きなウェイトを占めているが、企業内部のソフトパワーも同様に重要であると感じた。しっかりした技術力以外にも、見学や展示面での整った環境、そして象徴的意義のあるものを記念として保存する、こうしたJALのような企業は真にハードパワーとソフトパワーを併せ持つ企業である。

見学を終えた後、私たちは大阪行きの飛行機へ乗り、大阪で豪華なディュッフェを体験した後、宿泊するホテルに到着した。

初日の体験は順調であった。明日も楽しみにしている。

日付：11月29日（火）1日目

大学名：北京語言大学

**氏名：沈丹**

期待と不安を胸に、私たちはついに「走近日企・感受日本」の旅を始めた。今日は初日ということもあり、私たちはJALの整備工場のみを見学した。

見学自体はわずか1時間程度であったが、私は飛行機に乗ったその時からJALとの密接な繋がりを感じていた。その思いやりあるサービスは3時間の旅を快適なものに変え、美味しい機内食は私を虜にした。そして工場に到着した後、私たちはまず飛行と飛行機に関する基礎知識について学び、その後歴史的な陳列物や模型を見学した。ただ残念だったのは模型に乗り機長体験をすることができなかったことである。

その後の整備工場見学では、飛行機の異なる名称についての「秘密」、ボーイング777との初めての至近距離での接触、日本の初代の飛行機の正体など飛行機についてあまり知識がなかった私にとり、とても多くの収穫があった。また同時に私たちは飛行機が着陸する様子を二度見学することができた。そしてその時の陽の光がやさしく顔を照らすと、心の中に不思議と嬉しさがこみ上げてきた。

ことわざに「民は食を以て天と為す」とあるが、旅の疲れはもちろん美食で癒されるものである。今日のスケジュールは楽しいビュッフェと中島さんからの念入りな注意事項の説明によって終わりとなった。明日はどういった一日となるだろうか、私は今から楽しみである。

**日付：11月29日（火）1日目****大学名：北京語言大学****氏名：陳婧怡**

朝4時の北京の様子を見たのは久しぶりであった。出発のこの日は緊張と興奮が入り混じり、昨晩はベッドに入っても何か忘れ物はないかと気になっていた。そして朝起きてからは改めてパスポートから資料や荷物など確認をし、ついに8時25分の飛行機で東京へ向けて旅立った。

初めての出国で、内心は興奮と不安に満ちていたが、印象深かったのは日本側のスタッフや先生そしてフライトアテンダントの皆さんが常に礼儀正しかったことである。お辞儀に加え「ありがとうございます」の一言には、さすがに日本は礼儀正しい国だと思わされた。また空港で預け入れ荷物を引き取る際、とあるおばあさんが一人でベルトコンベア上のスーツケースを取ろうとしたところ、近くにいた中年男性がそれを手伝い、おばあさんが感謝を述べると、その中年男性もお辞儀をしてそれに応えていた。これは些細なことではあるが、こうしたことから日本人の優しさや礼儀正しさが感じられた。

東京に到着後は日本航空の整備工場を見学した。そこはとても大きかったが整然としていた。また至近距離で整備中の飛行機を見て、整備スタッフの皆さんへの尊敬の念が生まれた。彼らの努力が正に、人々の生命と安全を守っているのである。

その後、午後5時30分に大阪に到着した。ここでは今日初めての正式な食事をとることができた。夕食はとても豪勢であった。食事の後、中島さんの案内のもとホテルに到着し、この日記を書いて今日のスケジュールは終了となった。

疲れたが楽しい一日であった。おやすみなさい、大阪。

**日付：11月29日（火）1日目****大学名：中国農業大学****氏名：呉延淞**

今日は訪日の初日で、朝の4時に起きて急いで空港へ向かったが、今回の訪日への情熱が冷めることはなかった。セキュリティチェック、出国審査、待合そして搭乗とすべてが順調で整然とし、今この時日記を書いている自分がすでに大阪のホテルにいたことが想像できず、この日の楽しい経験がまるで夢のように感じられた。

初めての出国で、旅の途中のあらゆるものがとても新鮮に感じられた。日本人の客や他人への親切さ、マナー、お辞儀、笑顔そして挨拶には、思わず尊敬せずにはいられない。中国は5千年の文明の歴史を持つ国であるが、かつての礼儀というものについて、今では当時中国に学んでいた日本に及ばないのである。この現状には考えさせられるものがあつた。

バスの中では、ガイドの方から「日本人は子供の頃から自分のことは自分で解決し、他人に迷惑をかけないように教育されている。」という話を聞いた。対して中国では物欲に満ち溢れ、騒々しい街の生活はすでに多くの人に他人への思いやりや他人へ迷惑をかけないことを忘れさせている。中学生当時私のクラスの担任の先生が、素養の高い人というのは、周囲の人を心地良くするものだといつも言っていた。今回の訪日では、この言葉についてより深い理解が得られ、自分の道徳心や素養に対し、他人に迷惑をかけないというより高い基準ができた。

日中私たちは日本航空の整備工場を見学した。見学の際、日本側の中国人通訳者は、日本側の一連の天皇陛下搭乗、田中角栄首相搭乗、中国から贈られたジャイアントパンダの輸送といった歴史的事件についての紹介の際に、中国国際航空や中国南方航空などではこうした相応の歴史的記録がなく、企業として最後の砦となるのはその文化的歴史的基礎であると述べていた。

総じて言えば、初日はとても収穫が多く楽しかった。二日目も楽しみである。

**日 付：11月29日（火）1日目**

**大学名：国際関係学院**

**氏 名：王蓉**

今朝、私たちは東京に向かい、8日間の日本企業訪問の活動を開始した。私たちが乗った日本航空も今日訪れる最初の企業ということで、皆は期待に胸を膨らませていた。

お昼に東京に着いた後、私たちは早速日本航空の整備工場に向かい、飛行原理などの解説に耳を傾けた。本来飛行機は交通手段の一つだが、飛行機の安全運航は整備士によって厳しく守られている。速度、高度、風向き、時間などこれらはすべて細かな測量と計算が行われ、乗客一人ひとりの生命の安全を担っているのである。こうした職業倫理に私はとても感服させられた。その後のシミュレーター見学では、機長やフライトアテンダントの衣装を着て記念写真を撮ることができた。そしてコックピットでは直に運航乗務員の業務環境を体験することができた。目がくらむほどの様々なボタンを見て、私はこの業務には並外れた才知と注意深さが必要だと感じた。

また初めての訪日ということもあり、私にとって印象深かったのは日本のサービススタッフがとても親切だということであった。客が何を言おうが常に笑顔で対応する姿に私は人としての温かみを感じた。これまで中国国内で何度かこうしたこと聞いたことがあつたが、自分が体験するのは多少違う感覚がした。いずれにしてもこの点に私は日本の優しい一面を感じ、今後7日間の活動が楽しみになった。

一日に二回飛行機移動がありとても疲れたが、日本での初体験を経て私はやはりこの国が好きになった。今日はしっかり寝て、新たな一日に備えたいと思う。

**日 付：11月29日（火）1日目**

**大学名：国際関係学院**

**氏 名：杜佳蓉**

東京行のJL20便の搭乗口で日本航空のスタッフからの歓迎を受けた。彼らは歓迎の横断幕を掲げ、さらに中国語で「ようこそ」と声をかけてくれた。これには朝早くから日本側の熱意を感じ、飛行機に乗るため早起きしたにもかかわらず、すぐに気分が良くなった。

この他、引率のスタッフの心配りには驚かされた。中島さんは私たちの体調を気遣い予め様々な薬を準備し、集団

行動の際は毎回年配の団長さんが列の最後尾で全員がついてきているかを確認し、さらにはホームステイ先に向かう交通費すらも準備してくれていた。こうした彼らによるスケジューリングや細部への気配りによって、私たちの旅は順調なものになっているのだと思った。

午後は日本航空の見学であった。私は初めて間近で飛行機の全貌を目にし、同時に飛行機の整備に関しておおよその理解ができた。一企業が最終的にもたらすサービスは、飛行機の整備、離陸、着陸そしてフライトアテンダントによる細やかなサービスなど、企業の各部門の厳しい管理によってもたらされる成果だと感じた。企業は国民経済の細胞であると言うが、各企業は内部の各部門の調和が必要であり、皆が自分の仕事を全うすることで企業の価値が最大限発揮され、またそうすることで国の経済の発展が推進されるのである。

**日 付： 11月30日 (水) 2日目**

**大学名： 北京大学**

**氏 名： 楊涵**

偉大な豊臣秀吉が永遠にこの街を守っている。

パナソニックは世界に名だたる電気製品の企業であり、松下幸之助の物語は幼いころから耳にしていた。そしてこの日は大阪にあるパナソニックエコテクノロジーセンターを見学し、そこではパナソニックのもう一つの姿である環境への優しさに触れることができた。生態環境の保護のため、パナソニックは多くの資金を投じこのエコテクノロジーセンターを建設し、古い冷蔵庫や洗濯機、またブラウン管テレビなどを回収している。そうした中私がかつとも興味深かったのは、彼らの家電回収ラインに使われている原理であり、浮力や反射波長といったものは私が学校で学んだことのある理論知識だが、パナソニックではこうした知識を巧みに設備に応用し、廃棄部品の仕分けを行っており、とても感心させられた。使用済家電の回収や処理の面において、パナソニックは日本ひいては世界でも最先端にあり、彼らは新型家電の生産と同時に、家電の回収を考慮し、使用済家電の回収率は90%に達している。こうした環境保全への取り組みは私たちが学ぶべきものである。

午後は大阪大学を訪れた。ここで私が一番興味を持ったのは、彼らのレーザーエネルギー学研究センターであった。というのも自分の専攻に関係があり、私自身学校の光学討論班でレーザーに関する紹介をしたことがあるため、こうした分野には比較的詳しくあったからである。ただ正確には私自身もレーザーの実験室を初めて訪れ、また教授も日本語で解説をしていたが、その大部分の原理については理解をすることができた。その後の質疑応答で私は二つの質問をしたが、回答したのは中国出身の先生であったため、この時ははっきりと理解することができた。その後は大阪大学の学生との交流で、日本の学者の科学研究に対する真摯な態度について知ることができた。

**日 付： 11月30日 (水) 2日目**

**大学名： 北京語言大学**

**氏 名： 陳婧怡**

お早う、大阪。

この日は朝6時に起きて大阪城公園を散策した。12月間近の大阪はまだ冬の訪れを感じさせず、その水墨画のような風景は、私のような写真撮影が苦手な人でも絵葉書のような写真が撮れるほどであった。風景が良く、また空気も良く、気分も自然と良くなった。

豪華な朝食の後、私たちはバスで今日の最初の見学先であるパナソニックエコテクノロジーセンターを訪れた。パナソニックエコテクノロジーセンターの理念は、商品から商品への資源循環型モノづくりであり、スタッフの解説や実際の見学を通じて私たちはこうした理念への理解を深めることができた。パナソニックは松下幸之助氏による創設当初から環境保全の理念を有し、企業が発展していく中で、次第に地球環境との共存という目標が確立されていった。また

パナソニックエコテクノロジーセンターの創設は、より多くの就業機会を提供するもので、障がい者へも特別業務を提供しており、日頃から多くの学生が見学を訪れ、彼らに資源の大切さを教えている。こうしたことに私はとても感動させられた。正にパナソニックの環境保全理念が人々の信頼を獲得し、それが企業の安定成長に繋がったのかも知れない。環境保全の面において中国および中国企業が日本企業に学ぶべき点はまだまだ多く、より良い地球環境のために共に協力していくべきだと思う。

大阪大学の近くでの昼食の後、私たちは今日の2つめの見学先である大阪大学吹田キャンパスを訪れた。ここではまず手厚い歓迎と挨拶の後、皆は同大学の物理学研究、核融合によるエネルギー提供について見学した。その後日本の学生と中国の学生が共にグループに分かれてそれぞれが選択したテーマに沿って交流と討論を行った。一時間を超す交流で皆は打ち解け、熱のこもった討論が繰り広げられ、その後5つのグループがそれぞれ発表を行った。その際日本や中国の学生のユニークな発言がある度に会場はとても盛り上がった。グループ討論終了後は両国の学生が夕食を共にし、食事での交流を通じて互いの友好を深め、Lineの交換をしたり、再会の約束をしたりする姿も見られた。こうして今日の日程も終了となった。その後私たちは新幹線のぞみ号に乗り、次の都市である名古屋に向かい次の旅に備えた。

おやすみなさい、名古屋。

**日 付：11月30日（水）2日目**

**大学名：中国農業大学**

**氏 名：雷超**

今朝起きてから朝の天守閣を見ると、色合いがよりはっきりとし、夜よりも更にきらびやかに見える。ホテルでは洋食以外にも和食も堪能でき、とても幸せだった。

パナソニックエコテクノロジーセンターでは、思わず日本の家電回収産業に感心させられた。厳しく制御された回収ラインでは部品や材料の一つひとつがきちんと仕分けされていた。そして同社はまた文化教育も重視しており、学生を対象とした環境保全意識教育を行っている。こうした点は私たちも学ぶべきだと思った。

お昼は本格的な洋食であったが、一部の学生の口には合っていないようであった。その理由は海鮮（私は青島出身なので生ものは問題なかった）以外にも食事マナーへの不慣れもあった。ここで提案だが、伝統的な日本料理にしてはどうだろうか？皆の希望の一つでもある本膳料理のような形式がより良いように思う。

大阪大学は革新力が世界で18位、日本で1位ととても素晴らしい。核融合の紹介については、正直なところあまり理解を深めることができなかった。よかった点としては、日本の学生と互いの国への見方などについて意見を交換し、見識を広げ、不足している点を自覚できたことである。晚餐会では、その目的は食ではなく皆が交流を深めることにあり、とても楽しいひと時であった。そして私自身も与水凜さんという初めての日本の友達ができ、彼は中国語が上手で、交流には何の問題もなかった。その他加奈ちゃんという可愛い女子学生とも知り合うことができた。私たちはアニメのワンピース好きという共通点があった。彼らとの再会、そして彼らの訪中を楽しみにしている。

**日 付：11月30日（水）2日目**

**大学名：国際関係学院**

**氏 名：寇家璋**

朝早くに起きホテルで美味しい朝食を楽しんだ後、この日の活動が始まった。今日私たちはまず兵庫県にあるパナソニックエコテクノロジーセンターを訪れた。同社は2001年4月にパナソニックが資本金4億円を全額出資して設立された。同社の基本理念は「商品から商品へ」、つまり廃棄物を宝物に変えるプロセスであり、同社ではこのプロセスを「トレジャーハンティング」と呼んでいる。現在従業員数は180名、年間処理能力は68万台である。今回同社への見学を

通じて、私はパナソニックの電気製品リサイクルを極限まで高める「自然との共存」の理念がとても印象深かった。

おしゃれな昼食の後、私たちは大阪大学での交流を行った。はじめに大阪大学国際教育交流センターの有川友子センター長からの挨拶があった。その後大阪大学の紹介ビデオを觀賞してから同大学のレーザーエネルギー学研究センターを訪れ、レーザーエネルギー学について見学をした。専門的知識については理解できなかったが、非常に強い学術的雰囲気を感じた。ここで最も盛り上がったのは大阪大学の学生との討論であった。私たちが選んだ討論のテーマは日中文化の相違点の比較で、私は恋愛観から討論してはどうかと提案し、結果私たちは日中の若者の交際における相違点について討論をした。例としては、日本の若者は交際中でも食事は基本的に割り勘だが、中国では基本的に男性が支払う。また日本のカップルは公の場でいちゃつく(例えばキスのような)行為はしないが、中国の若者はあまり気にしない、といったことである。その後各グループの素晴らしい発表によって討論が終了した。終了後は彼らと夕食を共にし、胃袋が満たされただけでなく、自分たちの視野も広がった。また彼らのおしゃべりを通じて日本語の能力も高まり、内面も充実させることができ、今回の活動はとても意義深いものになった。

充実した一日が終わった。今日はしっかり寝て、明日に備えようと思う。

**日付：12月1日(木) 3日目**

**大学名：北京大学**

**氏名：楊涵**

車山前に到りて必ず道あり、道あるところにトヨタ車あり。

初めてこのキャッチコピーを聞いたのは私がまだ小さい頃で、当時は日本車についてはあまりよく知らなかった。周囲では日本車の排気量が小さく、ドイツ車の排気量が大きいということで、ドイツ車を選ぶ人が多かった。しかし今回トヨタ自動車での見学を通じて、私自身日本車についてより理解を深めることができた。トヨタの生産工場には大規模な生産ラインがあり、プレス、溶接、塗装、組立など各段階に大量のスタッフがいて業務を行っている。そしてチームリーダーが指導を行い、ひとたび問題が判明した場合、スタッフはアンドンを使いチームリーダーに報告することによって、生産効率を保証している。私にとって最も印象的だったのは「トヨタ生産方式」である。「ジャスト・イン・タイム」であれ「自動化」であれ、これらは一見ありふれたもの感じられるが、会社全体がこれらを守りモットーにすることでこれは一種の企業文化となっている。トヨタは1937年の設立から現在まですでに80年近い歳月を歩んできたが、同社はこうしたモットーにより前進を続けてきたのである。現在同社は従来型自動車から電気自動車への転換実現に向けハイブリッド車を開発した。現時点での販売台数は良好とは言えないが、同社は電気自動車の研究開発面でさらに前進を続け、環境保護に更なる貢献をしていくと信じている。また中国の企業もこうした点は学ぶべきだと思う。

日本での訪問も3日目ということで、多少の疲れが出てきていたので、このタイミングで箱根温泉の体験ができたのはとても良かった。私の故郷の遼寧省には多くの銭湯があり、湯船に浸かるのは東北人にとっては日常的だったため、箱根温泉に来て何の不自由も感じなかった。温泉は疲労回復にとっても効果があり、明日からまた元気一杯で活動ができると思った。

**日付：12月1日(木) 3日目**

**大学名：北京師範大学**

**氏名：蒲飛宇**

昨夜泊まった東急ホテルから外に出ると、多少の冷たさが混じった心地良い空気を感じることができた。昨夜は少し霜が降りたようで地面は湿っており、気を抜くと滑ってしまいそうだった。名古屋の道は他の都市より広く、歩いても心地良かった。

その後バスでトヨタ自動車元町工場を訪れ、生産プロセスの見学となった。日本語を学ぶ以前からトヨタ車の品質

や評判の高さについては聞いていたが、今日ついに同社の工場を見学することができた。その前に訪れたパナソニックエコテクノロジーセンター同様、元町工場の環境も素晴らしく、日本の工場らしい環境への配慮や社会との共存理念が余すところなく再現されていた。解説スタッフからはトヨタの歴史や圧縮、溶接、塗装、組立などの生産プロセスについて紹介があった。私にとって印象深かったのはトヨタ生産方式である。その一つはジャスト・イン・タイムで、必要なものを、必要なときに、必要なだけ供給するということであり、時間に正確な生産を目指している。もう一つは自動化で、異常を次の工程に持ち込まないということである。これらにその後見たPPTやビデオの内容を組み合わせ、トヨタという企業について多角的に理解をすることができた。私は彼らのきめ細やかさに感服した。これは正に日本人の性格的特徴を示している。

午後は数時間の道程を経て、夕刻6時近くになりついに箱根温泉のホテル天成園に到着した。ここは山間にあるため気温は多少低かったが、寒いというほどではなかった。小さな橋向こうの黄色がかかった灯りを見ているととても温かな気分になった。接待スタッフはとても親切丁寧に学生や先生のスーツケースの車輪の汚れを落としてからそれらをホテル内に入れた。そしてルームキーを受け取り、待ちきれず浴衣に着替え、自分の格好を鏡で見たところ、少しは様になっていると思った。それから急いで7階に上がり温泉に入った。私は今でも泳ぎができず、水深のあるところだと胸が圧迫される感じがするため、温泉も長くは堪能することはできなかった。夕食は手の込んだ和食で、皆の歌声と食後の散策の中、夜はまた更けていった。

**日 付：12月1日（木）3日目**

**大学名：北京理工大学**

**氏 名：呉玥瑩**

トヨタ自動車元町工場の見学

午前はトヨタ自動車元町工場の見学で、初めて本物の自動車生産ラインと作業方式を目にした。印象深かったのはトヨタの品質への追求そして効率の最適化と環境への責任感であった。

- ① 品質:トヨタは一貫して洗練された製品を追求しており、彼らには「自動化」という技術的キーワードがある。「働」は、「動」にニンベンを足したもので、各プロセスに対し高い基準での任務完成を求めるものであり、異常を次のプロセスに持ち込まないことを意味している。仮にあるプロセスで異常を発見した場合は、アンドン(異常表示盤)を作動させるとそのプロセスの位置が表示され、チームリーダーが駆けつけ問題を解決する仕組みとなっている。
- ② 効率:世界的規模の企業であるトヨタでは毎日の生産量への要求もとても高いため、生産効率も重要なポイントとなっている。生産効率を高めるため、彼らは次のような措置を講じている。〈1〉一本の生産ラインで複数車種を生産。〈2〉ドア無し作業。これによって作業時の車への出入りが楽になり、スペースの節約にもなる。〈3〉ジャスト・イン・タイム。パーツ原料が記された「カンバン」により在庫や入庫をより良く管理し、ムダを回避する。〈4〉サプライヤーが工場の求める順序で納品することで、搬送への人力や時間を節約する。
- ③ 環境保全:トヨタは「環境に優しい製品は環境に優しい工場と環境に優しい人々によってつくられる」ことを確信し、彼らの製品が社会に貢献できるよう多くの人やモノを新エネルギー自動車の研究に投じている。

今回トヨタの工場を見学できてとても楽しかった。昼食後の質疑応答ではトヨタの中国における発展プランや将来展望などについて知ることができるなど多くの収穫があり、とても満足している。

**日 付：12月1日（木）3日目**

**大学名：中国農業大学**

**氏 名：彭興偉**

昨日の「経験」から、ホテルでの朝食はしっかり食べるべきだと思った。と言うのも、お昼の洋食では満腹にはならないため、朝食をしっかり取ることが今回の旅における鉄則となった。

今日はトヨタの元町工場の見学で、綺麗な尾形さんという女性が私たちを案内してくれた。生産ラインはプレス、溶接、塗装そして組立とあり私たちは主に最後の工程を見学した。記者の趙さんから印象深かったのは何かと聞かれた際、私は「everything is in order」と答えた。皆が自分の仕事のリズムを持ち、ジャスト・イン・タイムの管理の下で高品質の製品が生産ラインから市場に向けて出荷される。そして自動化の「ニンベン」は、動きではなく働きを意味する。ここで私に一つの考えが生まれた。

各スタッフがアンドンを作動させるということは、つまり彼らの仕事にミスがあったか或いは経験不足による上司の手助けが必要な状況が発生したことを意味するが、これでは自分の欠点を晒すことにはならないのか？上司がどのようにそれを判断するのか？減給など相応の処罰が与えられないのか？これらは人の心が試されている。

この他トヨタ会館で自動車文化を体感できたことは、私たちにとって直接的な収穫であった。私たちは車の免許がないがWingletを試乗したところ、やはり運転下手で「事故だらけ」になってしまった。それでも、基地から文化教育まで一体となったこれこそが企業というものだと思った。

昼食の際、私は「文化」に関し「トヨタはどのように新入社員へ企業文化の研修を行っているのか？」と尋ねたが、その最良な答えは、上下一致、至誠業務に服し、産業報国の実を挙げべし、という豊田綱領にあると思う。

**日 付： 12月1日（木） 3日目**

**大学名： 国際関係学院**

**氏 名： 寇家璋**

時間通り朝6時30分にルームメイトから起こされ、忙しい一日が始まった。これまで同様美味しい洋食を堪能した後、トヨタ自動車元町工場の見学へ向かった。同工場の面積は天安門の4～5倍あり、工場に足を踏み入れるとすぐにその美しい景色に目を奪われた。自分のこれまでの印象では、工場とは埃っぽく味気のない場所であったが、ここはそれとは違い、赤い楓の葉が私の眼を引き付けた。ただ商業機密の理由で工場内にはカメラや携帯電話の持ち込みができず、写真を撮れなかったのは残念だった。同工場で最も印象深かったのは「カンバン」で、必要な量だけ生産するという理念には驚かされたと同時に、日本企業の「環境への優しさ」という進んだ目標を改めて体感することができた。その次は「良い品よい考」である。良い製品、良い考えは同様に企業の発展や革新になくってはならないものである。その後、私たちはトヨタ会館を見学し、高価な車に乗って記念写真を撮り、最高の気分だった。昼食はトヨタが私たちのために美味しい洋食を手配してくれた。そしてトヨタの工場の見学を終えた後、私たちは5時間近くかけて、今いる箱根湯本温泉のホテル天成園に到着した。

ホテルに入り私たちはすぐに温泉を体験した。日本人の習慣ではまず先に椅子に座り身体を洗い、その後温泉に浸かる。そして露天風呂があると聞き、何の迷いもなく露天風呂に向かった。そしてここにはマッサージもある。本当にこれ以上ないほどリラックスができた。温泉に浸かった後は再び身体を洗い、一日の疲れが吹き飛んだ。夕食では量の上に座り日本の鍋を食べながら、文化が融合する心地良さを改めて感じた。

同じ学校の団員と一緒に感想を書きながら、これまでの収穫について話し合い、今日一日のスケジュールがすべて終了した。

明日も温泉に浸かりたいと思う。

**日 付： 12月1日（金） 3日目**

**大学名： 北京語言大学**

**氏 名： 韓璐璐**

訪日三日目、午前はトヨタ自動車の元町工場とトヨタ会館を見学し、トヨタの発展の歴史や現段階における市場状況や自動車製造のプロセスについて知ることができた。

トヨタは「お客様第一」の考えに基づき、「ジャスト・イン・タイム」や「自動化」といった二大思想を中核とし、先進的技術により開発と生産を行っている。かんばん方式を利用しての時間と労力の節約、アンドンを利用しての問題の速やかな解決により「品質は工程でつくり込む、不良品を次の工程に送らない」を実現している。また新型ハイブリッドカーの開発にも力を注いでおり、現在世界で1000万台以上販売しているなど、環境保全事業にも自らの貢献をしている。

この他、お昼のスライドショーや質疑応答を通じて、1970-1980年代からトヨタは中国の自動車業界の発展に大きな貢献をしていることを知った。「自動車の街」である長春出身の私は、トヨタがはるばる一汽を訪れ技術指導をする様を目にし、とても光栄に思うと同時に感謝の念がこみ上げてきた。またトヨタは両国の民間交流にも力を入れており、一汽や広汽との提携以外にも、環境保全、西部開発、慈善等の公益事業にも積極的に参加している。

その夜は楽しみにしていた箱根温泉に到着した。鮮やかな和服に着替え、温泉を満喫し、仲間たちと楽しい親睦の時間を過ごしたことで、ここ数日の疲れがとれた。これからの数日は東京での活動となる。

**日 付：12月2日（金）4日目**

**大学名：北京大学**

**氏 名：詹文茜**

今朝箱根温泉を離れる際、幸いなことに天気がとても良かったため、富士山の全貌を目にすることができた。お昼、私たちは日本の首都である東京に到着し、和式の昼食を堪能した後、この日の企業見学となった。三菱東京UFJ銀行において私たちは責任者の方から同銀行の状況について説明を受け、日本の銀行のリスクマネジメントへの重視というものを感じることができた。中国国内の多くの銀行では製品プランが先行し、問題点の解決を後回しにしているのとは比べ、三菱東京UFJ銀行における製品やサービスのリリース速度は比較的ゆったりしているかも知れないが、その行き届いたリスクマネジメントにより、その歩みはより確かなものとなっている。

この他、私たちは三井物産を訪問した。中国国内にはこのような総合商社がないため、私たちは同社の組織モデルにとっても興味を持った。そして夜の懇親会では、さらに自分たちが興味のあることや不思議に感じている点などについて同社のスタッフと交流をすることができた。また特に今晚の交流の際、私はかつて光華管理学院でEMBAを学んでいた多田さんと知り合うことができた。彼との交流では三井物産についての多くの情報だけでなく、彼の北京大学時代の多くのエピソードについて聴くことができ、とても来た甲斐があった。

**日 付：12月2日（金）4日目**

**大学名：北京師範大学**

**氏 名：呂家樂**

早朝の山間に鳥のさえずりが響き、清らかな風がゆったりと吹きつける様子は、その場の静けさをより際立たせ、人と自然が一体となる感じがした。朝食前に温泉に浸かり、その後食事をして東京へ向かった。道中は依然として美しい景色で、富士山の雄大で美しい姿を改めて目にすることができた。そして皆は歌やおしゃべりなど楽しく道中を過ごした。

お昼に私たちは東京へ到着し、高級レストランでの昼食となった。そして午後、私たちはまず三菱東京UFJ銀行の見学を行った。世界でも最大規模の同銀行は、優れた金融商品や付帯サービスなどにより金融業界トップの位置にいる。日中国交正常化の前から、三菱銀行は中国の銀行との業務提携を行い、先駆的な壮举とも言える円と元との直接両替を実現した。国交正常化後、三菱銀行はさらに中国との業務に力を入れ、中国と日本をより緊密なものとした。中国の各業界における「先に実施、後で問題解決」の進め方とは対照的に、三菱東京UFJ銀行などの日本の金融大

手では先にリスク予測をする傾向にあり、可能な限り環境を整えてから安定的に実施していく。これも中国の各業界が学ぶべき態度である。

その後、私たちは三井物産を見学した。日本有数の総合商社である三井物産では、貿易や投資などあらゆる手段により、世界中の人や情報技術などを繋ぎ、より高い商業価値や社会価値を創造すると同時に日本の国際的影響力を少なからず高め、日本と外国との友好交流を促進している。

その夜、私たちは三井物産での懇親会に参加し、同社の多くのスタッフと交流を図った。その際私は同郷の人と知り合い、異郷の地での同郷人との出会いはとても嬉しかった。懇親会の途中では私のホストファザーも現場に駆けつけ、翌日の移動計画などを話し合った。これにはホームステイがとても楽しみになった。

**日 付： 12月2日 (金) 4日目**

**大学名： 北京理工大学**

**氏 名： 王韞**

今日私たちは箱根を離れ、日本でもっとも華やかな東京にやってきた。

昼食を済ませた私たちはまず三菱東京UFJ銀行を訪れ、そこでは初めに東アジア企画部の長谷川部長から温かい歓迎を受け、次いで同銀行の状況について紹介があった。三菱東京UFJ銀行の歴史は長く、1919年に遡る。同銀行は世界でもトップクラスの銀行として、多くの国や地域において業務を展開している。また中国においては、同銀行は改革開放以降初めて誘致した外資系銀行であり、中国との関係は長く、複数の都市に支店や事務所を構えている。

その後私たちは地下の金庫を訪れ、ここでは私自身のこれまでの好奇心が満たされた。金庫は私が想像していたのとは異なり、顧客のセーフティーボックスが密集しており、多重のセキュリティ対策がとられ、さらに1メートルの厚さの大きな扉があった。金庫の見学の後は窓口の外で銀行の営業方式を観察した。

そして三菱東京UFJ銀行を離れた私たちは三井物産を訪れた。これまで私は同社については何も知らなかったが、紹介を通じて三井物産は従来のメーカーとは違うことを知った。総合商社である三井物産は直に生産設備を所有するのではなく、企業全体として人を資本とし、マーケティング、金融、物流、リスクマネジメント、工場などについて、あらゆる国や地域のパートナーに対して彼らが求めるサービスやソリューションを提供している。三井物産の主な事業範囲は金属、設備、インフラ、化学品、エネルギー、生活産業および新事業分野で、こうした全方位的なビジネス展開モデルは中国ではほぼ見かけることはない。中国にもこのような資本や技術が充実した多分野にわたる企業が現れてほしいと思う。

**日 付： 12月3日 (土) 5日目**

**大学名： 北京大学**

**氏 名： 馮莎莎**

今日はホームステイの日。朝、ホテルのロビーでそわそわしながらホストファミリーの到着を待ち始めると、思いがけず私のホストファミリーは早々に私を迎えにきた。その後まず私たちは近くの日枝神社を訪れ、手洗いやうがいからお賽銭を入れての参拝、そして神社の宝物殿の見学など、これまで学んだ「日本文化」の授業の知識以外にも、新たに多くを学ぶことができた。

以前からすでに、私がホームステイ中に行きたい場所や買いたいものなどについてホストファミリーの日出美さんからのメール確認があったので、私も今回体験したいことやその目的などを伝えていた。私は彼女たちと一緒に食材の買い出しなど、最も日常的な生活を体験したかった。これはとても貴重な体験であり、ショッピングや観光は私にとってさほど重要ではなかった。

ホストファミリーのお宅に到着して気付いたことだが、まさに王磊先生の言っていたとおり、ホストファミリーは私のた

めにおそらく長い時間をかけて準備をしていたのだと思った。彼らのお子さんも来て皆一緒に夕食をとり、椅子が変わったとかテーブルクロスが新しくなったなどと言っているのを聞いて、家具も新調したのだと思った。また彼らは私のプロフィールから明日が私の誕生日だと知り、わざわざ皆で私の誕生日を祝ってくれた。

以前からのメールでのやりとりの際、ホームステイ期間中が丁度私の誕生日であることをホストファミリーに伝えようか私は迷っていた。だが誕生日だと伝えてしまえば皆に手間をかけてしまうと考え、メールでは伝えず、実際に会って日本の家庭ではどのように誕生日を過ごすのかを聞いてから改めてどうするかを決めようと思っていた。だが結果的に皆が事前に準備をしてくれていたの、とても嬉しかった。

ホストファミリーのお宅はとてもおしゃれで、庭の木をどうするか、家屋の面積、プランの選択など当時引っ越して来る際の色々な考えについての話も聞いた。家屋は木造でとても軽く、地震が来ても比較的安全に家屋の構造は維持される。こうした点は中国とは異なる。

その夜ケーキを食べる際、皆は私のために誕生日の歌を歌ってくれた。紅茶をすすりケーキを食べ、さらにホストファミリーから誕生日プレゼントももらい、とても嬉しかった。

**日 付： 12月3日 (土) 5日目**

**大学名： 北京師範大学**

**氏 名： 陶悦**

今日はついにホームステイの日である。私たちは朝9時からホテルのロビーでホストファミリーの到着を待った。数名の団員が次々とホストファミリーとの対面を果たした後、私もついにシゲちゃん(おとうさん)やナオちゃん(おかあさん)と対面した。その後シゲちゃんは先に帰宅しご飯の準備などをし、ナオちゃんは私を東京タワーや秋葉原などへ案内してくれた。また東京タワーでは記念品も買ってくれた。

帰宅すると、シゲちゃんはとても豪華な夕食を作ってくれていた。しかも私は辛いものが好きなので、わざわざ麻婆豆腐も作ってくれていた。シゲちゃんの作る料理はとても美味しかった。食事の際は彼らといろいろおしゃべりし、気が付くと夜9時を過ぎていた。食事後は彼らの旅行アルバム(ナオちゃんとシゲちゃんは普段よく旅行する)も見せてもらい、私はアルバムを見ながら彼らのあたたかな愛を感じることができた。

寝具は彼らが私のために準備してくれたもので、純和式の畳、そして布団はとても美しくきれいだった。

**日 付： 12月3日 (土) 5日目**

**大学名： 北京理工大学**

**氏 名： 趙家樑**

今日私たちはそれぞれのホストファミリーとの対面を果たし、彼らの決めたスケジュールで行動した。

私のホストファミリーは大人二人、7歳のお子さんそして雨(Ame)という名前の4ヶ月の子犬であった。午前、私たちは皇居と東京タワーを訪れた。きれいな景色はとても印象的であった。

午後、埼玉にある彼らの自宅に戻った後、私たちは色々な話題についておしゃべりをした。その中でも、ホストファザーとホストマザーはいずれもかつて中国での留学経験(約20年前)があり、他にも多くの国を訪れていることを知った。特にホストファザーは、一人でバックパッカーとして北京から列車やバスを乗り継いで成都、西安、ラサそしてネパールまで訪れている。そして彼がエベレスト登頂時の写真を見せてくれた時、私は一瞬信じられない思いだったが彼のすごさに圧倒されてしまった。それ以外にも彼はボートでカナダとアラスカの間の河を越えたこともある。こうした探検そして思い立ったら行動する精神に私は感心してやまなかった。

かつて多くの人の夢は「世界一周」であったが、最近では私自身年齢を重ね、足を運んだ地が増えるにつれ、より「世界は大きいので、色々見て歩きたい」と思うようになった。私自身も今後ホストファザーやホストマザーのように多く

の景勝地を訪れたいと思う。

**日 付：12月3日（土）5日目**

**大学名：北京語言大学**

**氏 名： 閔良博**

今日から待ちに待った二日間のホームステイが始まる。

朝に集合して間もなく私は責任者の中島雪美さんに呼ばれた。実は私たちが集合する前からすでに現場で待っていた方が私を迎えにきた方で、私のホストファザーの城谷さんであった。どきどきしながらも私は城谷さんとその場を離れ、この日の旅が始まった。

青く透き通った空がさらに際立たせる皇居や井の頭恩賜公園などの美しい景色を、私は大いに堪能した。さらにこうした美しい景色の中、一つの小さく優美な神社があり、私はそこで家族の健康と一家円満を祈った。それ以外にも秋葉原の散策では、初めて二次元の世界を間近で体感することができた。

ここで城谷さんの優しさに感謝を述べたい。今回の訪日前から城谷さんは私のために至れり尽くせりのスケジュールを組んでくれていた。そして私との対面後も私の希望に沿って予定を調整し、ショッピングであれ、また観光であれ、東京を満喫することができた。

**日 付：12月3日（土）5日目**

**大学名：中国農業大学**

**氏 名： 高潔**

顔を洗い朝食を済ませ、待ちきれない思いでロビーに集合し、私を待つホストファミリーとの対面となった。松島さんとは何度かのメールのやりとりを通じて彼ら家族の写真を見ていたので、会うのがとても楽しみであった。松島さんはとても時間に正確で、9時30分丁度に私とホテルで対面し、それから電車で大宮区の自宅へと向かった。その道すがら、彼は家族の状況や奥さんの真由子さんとの馴れ初め、そして一人息子の大志さんについて紹介してくれた。そして自宅に到着すると奥さんや息子さんは温かく私を歓迎してくれた。息子さんはまだ8歳で英語があまりできないため、最初は恥ずかしそうにしていたが、私の熱意や誠意を見て次第に打ち解け、私の手を引いて家中を案内してくれ、さらにつたない英語で彼の「宝物」であるマンガ本や怪獣のおもちゃを紹介してくれた。その後私はホストファザーとホストマザーに「喜上梅梢」の切り紙細工の掛け軸と京劇の世界で勇気と魅力を象徴する趙子龍のボールペンをプレゼントした。そして暫しの休憩の後、私たちは松島さん一家がよく行くレストランへ食事(私の一番好きなうどん)に向かった。

今日の午後は彼らの普段の週末の生活を体験することになり、午後早速ホストマザーが日頃訪れるヘアサロンで日本式のヘッドスパを体験し、楽しい午後が終わった。息子さんは普段の学校以外にも習い事をしており、水泳や英語が好きとのことである。こうした点は中国とさほど変わらないと思った。

松島さん一家は大宮区の閑静な住宅街に住んでおり、二階建ての家屋である。私が住む部屋の中にはおもちゃや置物、本などがきちんと配置されていて、またホストマザーはわざわざ私のためにレースの花柄の布団を準備するなどすべてが綺麗に整っていた。こうした点も松島さん一家の生活態度なのだと思った。松島さんや奥さんは比較的年齢も高く仕事のキャリアも豊富なため、暮らし向きも裕福である。若者世代の話題には多少疎いが、それでも至るところで彼らの心遣いが感じられた。

日 付：12月3日（土）5日目

大学名：国際関係学院

氏 名：倪話秋

今日の朝、私たちはどきどきしながらこれから二日間を共に過ごすホストファミリーの出迎えを待っていた。

今回私の世話をしてくださる西山佳夫さんはテルモのスタッフで、小平市に住んでいる。彼は11月上旬から私に連絡をくれ、今回のスケジュールなどを互いに相談していた。朝は浅草寺へ向かい、そこでは着物を身に纏った多くの日本女性を目にした。また浅草寺では小吉のおみくじを引き、待っているものは必ずやってくるとの内容を教えてもらった。その後、下町風俗資料館を訪れた。ここは明治、大正、昭和初期の東京の生活の様子を紹介しているところである。当時の日本は和と洋が入り混じり、和式の部屋で洋式の商品を販売しており、さらに劇場では舞台劇や歌舞伎が上演されていた。日本文化は西洋文化の衝撃に対しそれと食うか食われるかの争いをするのではなく、西洋文化を吸収していった。こうした点は、おおかた私が浅草寺、上野公園、ひいてはホテルニューオータニで着物姿の女性を見かけるのに対し、故宮や頤和園では漢服姿の中国人を見かけない原因とも関連していると思う。

午後は江戸前のもんじゃ焼きやお好み焼きを食べた後、東京国立博物館や上野公園を見学し、改めて日本文化の発展過程における外来文化の吸収や改良について目にすることができた。

夜に西山さん宅に戻ると、ホストマザーは焼き肉の準備をしてくれていた。その他私に和室と部屋の中には飲み物とお菓子などを準備してくれていて、とても感動した。

日本の浴室はとてもきれいだった。

日 付：12月4日（日）6日目

大学名：北京大学

氏 名：陳麗麗

今日はホストファミリーとの二日目である。朝食から出発前までの時間は、何の話題をしゃべろうかと頭を悩ます必要なく、遊んだりまた家事や掃除をしたりするなど皆が思い思いの事をしていて。私はこうした雰囲気がとても好きで、建前の賑やかさよりもこうしたひと時の静けさを共に過ごせることの方が、より主人と客人との和やかさを示すことができると思う。私と友人の付き合いもこうした感じで、今回ホストファミリーとも気が合った。

朝食を済ませ、ホストファザーや息子さんと東京タワーそして近くの公園で遊んだ。街中を歩いていると、路地にはほとんど人影がなく、複数のビルには小児科、歯科、心臓外科などの診療所を見かけた。私はそこでホストファザーの川岸さんに個人診療所がなぜこれほど発達しているのかを聞いたところ、主に医療保険政策に関係しているとのことであった。日本は全国民が医療保険に入っているが、大きな病気の場合に公立病院へ行き、小さな病気は診療所を利用し、診療費の一部を負担するだけでよい。

中国、とくに私の故郷では小規模の診療所も少なからずあるが、その多くは信頼できる資質がなく、中国医学や西洋医学問わずそのような状況である。そのため、私はこれまで診療所での診察よりも公立病院を信じてきた。そして中国では有名な公立病院であるほど皆がそこに殺到する。

対して、模倣や粗悪といった事に関しては日本ではほとんど心配する必要がない。熱感応技術を使い、偽札作りへのコストを高めることでお金すら調べる必要のない国では、その他の面の偽物についても相応の予防手段があるのだろう。

ホストファザーと息子さんと遊びに出かけた際、息子さんは英語ができないため、私と彼とは直接の交流はできなかったが、それでも道すがら受け取ったお菓子付きのチラシやポケットティッシュなど、彼はすべて私にくれた。こうした点はホストファザーと同様に紳士的で、言動による手本の効果というものを感ずることができた。

日 付：12月4日（日）6日目

大学名：北京師範大学

氏 名：賀婷雅

今日はもう半日しかホストファミリーと一緒にいられない。それを思うと、朝起きてすぐに別れがつかなくなった。おかあさんから今日私がしたいことを聞かれたので、猫を抱きながらずっと考えた。実際はどこにも行きたくなく、おとうさんやおかあさんといっしょに家で美味しい煎茶を飲んで、猫と遊んだりしながらおしゃべりをしたい。そして一緒にスーパーで買い出しをして、地下鉄に乗って、うどんを食べたい。それからおとうさんとゴルフに行き、おとうさんとパン作りをしたい。でも私たちにはそれだけの時間がないので、朝起きてすぐに私はおとうさんとイチゴのケーキとハムのパンを作った。おとうさんが生地をこねながら私に作り方を詳しく教えてくれる姿に、私は心がとても温かくなった。その後おとうさんは水族館に連れて行ってくれた。そこでは私が開いた口が塞がらないくらい驚いている表情を見て、おとうさんは子供の様に笑っていた。そして小さな私が人波にのまれ、ガラスの向こうの魚が見えなくならないように常に私を気遣って前を歩いていた。

特別な事というのはなかったが、すべての些細な事が感動的で、とても名残惜しかった。そのため夕方のお台場すら味気ないものを感じられ、心の中はおかあさんとおとうさんの姿で満たされていた。生活を共にした時間は短かったが、真心を通い合わせたことは永遠に変わらない。忘れ難いホームステイと一泊二日、そして辛い別れなど、今回の活動には本当に感謝している。

日 付：12月4日（日）6日目

大学名：北京理工大学

氏 名：張晨曦

今日も引き続きホストファミリーと一緒に東京見物をした。

この日印象に残ったのは日本の宗教文化、食文化そして教育の3つであった。

私たちは浅草寺を参拝したのだが、浅草寺の外には他の宗教の建物も見られた。ホストファミリーの説明により、私は日本人の多くには宗教信仰があり、また複数の宗教を信仰していることを知った。これは日本の近代文化が他の文化と融合を繰り返した結果だと思う。

日本の食文化を二つの文字で総括すると、一つは「冷」、もう一つは「生」である。中国と異なるのは、日本人はお湯よりも冷水を好むことである。初日に日本に到着し、気温そのものは高くなかったが、私の飲み物は氷が沢山入った水で、この二日間のホームステイでも冷たい食べ物がメインであった。

教育においては、日本の義務教育はとてもゆとりがあり、小学生の毎日の宿題にかかる時間はわずか5分間で、その他の時間は本を読んだりゲームをしたりと自由である。ただし私は他の家庭の教育状況を知らないなので、こうした方法が成功しているのかどうかは判断ができない。

また彼らの家屋の面積はとても広いとは言えないが、それでも二段ベッドの上段を子供自身の鉄道模型用のスペースにしていた。さらに子供が好きな鉄道関連の雑誌を購読するなど、子どもの興味への重視具合にはとても驚かされた。

日 付：12月4日（日）6日目

大学名：北京語言大学

氏 名：呉繼

今日ホストマザーは私を鎌倉に連れて行ってくれた。ここは海辺に位置するととてもきれいな街である。海には大勢の人がいた。冬が間もなく訪れる時期であるが、この日は寒くはなかった。娘さんは一人砂浜へ駆けていってお城を作

り始めた。そして近くからは私がアニメやドラマなどでよく聞いていた鳴き声をする鳥が沢山現れた。それはとても大きく、群れになって上空を飛んでいた。路上には注意喚起を促す看板があり、そこにはこうした鳥は食べ物を見かけるとそれを獲ろうと襲ってくるため注意が必要との内容が書かれていた。それでも鳥自体はとてもきれいだった。

鎌倉は風光明媚な景勝地ではあるが、観光客はとても多いというわけではなかった。鎌倉では綺麗さと静けさを感じることができる、生活に適した場所だと思った。

ホストマザーと二日間を共にし、日本の温かい家庭生活を体験することができた。彼女にはとても感謝している。ホストファザーも普段の休みの時間は多くはないが、しっかり休んでほしいと思う。

ホテルに戻った後、私たちはまた急いでお台場へ向かった。そこでは夜景を楽しむため二時間の自由行動となったので、私たちは観覧車に乗った。こうして楽しかった一日も終わり、ホテルに戻り明日への英気を養った。

**日 付： 12月4日 (日) 6日目**

**大学名： 中国農業大学**

**氏 名： 張洋中正**

「張洋、張洋」、朝7時、ホストファミリーのお兄さんが私と遊ぼうと熊のぬいぐるみを2つ持ちながら私の寝床までやってきた。これにはとても驚いたと同時に嬉しくもあった。ほどなくしてお子さん三人とも目を覚ました。彼らはとてもやんちゃで、家の中をあちこち遊びまわり、騒いだり、テレビでアニメを観たと思えば、ホストファザーの布団の中に入ってはしゃいだりしていた。その後朝食を簡単に済ませ、私たちはこの日の予定を開始した。

午前、私たちが向かったのは日本のアニメの聖地である秋葉原である。ここには多くの電気製品の販売店もあった。お昼は彼らがしばしば訪れるラーメン二郎はとても美味しかった。午後私たちは新宿御苑に向かい、そこでピクニックをした。私は弟さんの手を引き、肩には妹さんを乗せていたので疲れたが、それでもとても楽しかった。そこを離れる際、ホストファザーの秋山さんは私には良い父親になる素養があるので、将来きっと良い父親になれると言ってくれた。とても嬉しかった。

出会いがあれば別れもある。秋山さん一家は私をホテルのロビーまで送ってくれた。ただ中国語ができないためか私にずっとありがとうと声をかけてくれた。そして名残惜しくもお別れとなった。

その日の夜、私たちはお台場での夜景観賞となった。バス移動の最中、私はお台場の景色に中国広州を思い起こした。東京湾と珠江、レインボーブリッジと珠江大橋、異国の地でこれらは私に懐かしい故郷を思い起こさせた。

二日間のホームステイが終わったが、私自身複雑な感情が残った。秋山さん一家は私に日本の一般家庭の生活を体験させてくれた。彼らとの時間を通じて、私は日本の独立性や自主性を重んじる教育や親の子に対する接し方に、中国における子供を溺愛する教育の良さ悪しについて考えさせられた。

最後に秋山さん一家の幸せを願っている。そしてまた再会できることを楽しみにしている。

**日 付： 12月4日 (日) 6日目**

**大学名： 国際関係学院**

**氏 名： 曾粵儀**

今日のまあ君は昨日と同様元気一杯で、朝7時には一緒にアニメを観ようと私を起こしに来た。私はアニメを観ながらも急いで布団の畳み方をネットで調べていたが、結局澄川さんから畳み方を教わった。朝食は兄妹二人のサポートでおにぎり(子供式)の作り方を教わり、多少は澄川夫人の役に立つことができた。その後、私たちは花壇に水をやり、近所の梶野公園へ出かけた。

まあ君は公園に着くとすぐに木に登り、さらに公園内の登れる木すべてを登ってまわった。その後私たちは鬼ごっこを始め、私はここ一年達成できなかったジョギングの目標を達成できるくらい走り回った結果、これ以上動けないくらい

疲れてしまった。それでも走ることがこんなにも楽しいものなのだと初めて思った。それまで私は走ることがとても嫌だった。

帰宅途中、私たちは澄川さんが幼い頃好きだったブルーチェを買い、その不思議なプルンとした食感がとても美味しかった。その後武蔵野市立図書館を見て回り、そして丸亀製麺で食事をしたが、とても美味しかった。特にエビの天ぷらは美味しさに感動するほどであった。

今日もまたとにかく楽しく、私たちは明治神宮へ向かった。入口で写真を数枚撮った後、私たちは明治神宮近くの通りにある小さいながらも多くの人が行列をつくっているクレープ屋sweet boxへ行き、大きなソフトクリームのようなイエローストロベリーとクリームのカレープを持ちながら地下鉄に乗り、予定より30分近く遅れてホテルに到着した。

彼らは「風のような一家」であった。この二日間のあらゆる「謎の」、「楽しさ」を思い起こすと、つい笑みがこぼれてしまう。私は日本の家庭生活を充分満喫することができた。言葉の面の問題や時間がわずか一泊二日などといったこともあったが、私はそれでも不思議と彼らとの親近感や帰属感が得られた。私が今回着物を着ること以外に行きたい場所ややりたいことを言わなかったのは、「観光」や「ショッピング」は今後自分で来たときにすれば良いが、「家庭生活の体験」は一生で一度きりかもしれないからである。

夜はお台場でショッピングをしたが、ここでは述べない。彼らとお菓子を一緒に食べたこと、一緒に花に水をやったこと、一緒に芝生の上を走り回ったこと、これらは私の素敵な思い出です。澄川さん、澄川夫人、まあ君としょうこちゃん、皆さんを愛しています。二日後また会いましょう。

**日 付： 12月5日（月） 7日目**

**大学名： 中国農業大学**

**氏 名： 張洋中正**

物流は現在中国で話題となっている言葉である。その理由はネットショッピングの急速な発展により物流が中国において次第に注目されるようになったからである。この日の午前私たちはまずイトーヨーカ堂配送センターを見学した。ここで取り扱う主な商品は洋服とズボンである。工場の第一印象は、広い空間と密集した商品であった。この全自動の運搬機械は印象的だったが、特にユニークだったのは衣類がハンガーに掛けられた状態で運ばれることで直接売場での販売が可能なことであった。またここではイトーヨーカ堂以外の衣類も取り扱っている。

お昼は日比谷松本楼に向かい、そこでの昼食となった。この創始者の梅屋庄吉氏は、中国の国父である孫中山氏と一生涯の友人であり、孫中山氏の困窮、挙兵時期そして理想の実現や愛情の面で非常に大きな役割を果たした。彼らの紹介を通じ私たちも日中間の友好的な交流を目の当たりにすることができた。

その後、私たちは「しばしの帰国」となる中国駐日大使館を訪れた。ここではまず6つの大学の代表者がこの数日間の日本滞在で感じたことなどを発表し、その後薛公使参事官から彼自身の日本への印象についての紹介があった。その中では中国と日本は地理的に近く、貿易関係も日増しに密接になっていることから、今後日中関係はきっとますます良くなっていくとし、さらに「日中社会同質化」の構想についても言及があった。

最後に私たちは法政大学を訪れ、王敏教授の講演を拝聴した。王敏教授の講演のテーマは「日本で何を感じるか」で、中国文化を研究している汪德邁(Léon Vandermeersch)氏および王敏教授自身が30年間の日本滞在を通じて体験した日本の文化的特徴の紹介、そして日本を通じて中国を語る、中国を通じて日本を観察するという結論を総括として打ち出し、学生たちから大きな反響があった。

**日 付： 12月5日（月） 7日目**

**大学名： 中国農業大学**

**氏 名： 高潔**

今日は最終日の前日で、浪速物流見学、日比谷松本楼訪問、中華人民共和国駐日本国大使館での座談、法政大学での学習など充実した一日であった。

Station1: 浪速運送株式会社、ここでは「大規模物流」を主要事業としている。生産者と販売店を連結する配送を行っており、高度に自動化された機械の構造は比較的簡単で、機械伝動＋プログラム制御である。企業発展を念頭に入れ「正確な配送、つまり率先して生産者から消費者までの最後の一步を担う考えはあるか」という質問を遠慮がちなした場合、得られる回答はほとんどが否定的なものである。消費者にとってはこうした一步は間違いなく大きな利便性と成功であるが、構造から考えると物流業界の発展には、ネットショッピングプラットフォーム-第三者決済プラットフォーム-倉庫等付帯施設建設-関連制度-配送スタッフネットワーク構築など多くの必要条件が存在する。そしてこれらの条件の達成にはいずれも勇気やイノベーションが必要であり、国情を充分理解した上で柔軟そして大胆に行わなければならない。そして日本人の発想からすると、恐らく如何に現有のラインのオートメーション化を高めるかが考えられ、「新たな段階」の開拓というものはないのだと思う。オンライン・オフラインが連動した消費者の手元までの配送が物流業界の主流となることは必然的であるため、変化への勇気は特に重要になってくる。

Station2: 日比谷松本楼は、日中両国が孫中山氏をめぐり偉大な友情を重ねた場所である。ここは日中双方が歴史を客観的に評価し向き合うことを促している。国難や恩情は忘れてはならない。同様に、過去日中両国民はこれほど偉大な民族の垣根を越えた友情を構築することができなかったこともまた、現在の人々に今ある幸せを認識また大事にし、互いに友好そして尊重をすべきであることを示している。

Station3: 中国駐日大使館、ここではとてもリラックスできた。公使参事官からの日中関係についての紹介は私たちに現状を直視させるものであり、問題を引き起こさず且つ問題を恐れないことが大事だと感じた。両国の経済や文化交流が日増しに密接になる中、平和と発展こそが東アジア繁栄における主旋律である。

Station4: 法政大学の王敏教授から私たちへ「いかに哲学的目線で日本文化を見るか」といった平常心で素朴な観点からの紹介があり、買占めをしない、物事を大切に、敬天愛人といった価値観は日本人の生活や仕事のあらゆる場面に反映されており、私は自分の心に自然への尊重や畏敬、「自然・簡素」といった味わいへの共通認識を持つことができた。

**日 付： 12月5日 (月) 7日目**

**大学名： 国際関係学院**

**氏 名： 曾粵儀**

今日の朝食はホテルニューオータニの和式定食であった。窓の外には木々や流れる水、そして滝などが見え、その佇まいはとても趣があった。

今日の最初の活動はイトーヨーカ堂での見学で、その見学内容はイトーヨーカ堂における運送を担う浪速運送のサービスであった。私たちはエレベーターで上階に移動したが、このエレベーターは貨物用で、私たち訪日団全員さらにスタッフを合わせた40人近くを乗せることができるほど大きかった。教室内ではスタッフから、物流の中核理念はいかに商品を動かすことなく、時間とコストを節約するかということを知り、私は物流というものに新たな認識を持つことができた。工場見学では「衣類をハンガーに掛けたままの運搬」がとても印象深かった。それというのも、私は中国国内のデパートスタッフが従来商品と新しく入荷した商品とで混乱している場面を目にしたことがあるからで、衣類が生産者から消費者の手元までハンガーに掛けられた状態というのはとても新鮮な感じがした。臨時倉庫の紹介の際、限られた空間を有効的に利用するため、一階分を二階に分け、伸縮可能な商品棚を使うということをスタッフから聞き、日本人の「収納」へのこだわりを改めて感じた。限られた資源から最大の価値を創造するというこうした理念は、実のところ資源の融合と効果的な利用が必要な中国にとっても非常に貴重なものである。

今日二番目の訪問先は日比谷松本楼であった。松本楼は黄金色の銀杏の木に囲まれていて、二人のお年寄りが銀杏の木の下で水彩画を描いていた。また木漏れ日のまだら模様が美しかった。松本楼に足を踏み入れるとすぐに

宋慶齡女史がかつて弾いていたピアノを見かけ、物は古くなるが、故人の面影はより鮮明になる印象を受けた。おしやれな昼食の後、梅屋庄吉氏の曾孫の方から国父の孫中山氏と梅屋庄吉氏の真の友情についてのお話があり、こうした国の垣根を越えた互いに支え合う友情が永遠に語り継がれて欲しいと思った。この他、同じ事件に対する日中両国の呼称が異なることに気が付いた。例えば「九一八事変」は日本語では「満州事変」と言う。これはとても興味深い研究テーマだと思った。

今日三番目の訪問先は中国駐日本国大使館であった。バスから降り国章を目にした瞬間里帰りをした感覚になった。この日私は国際関係学院を代表して総括を述べることになっていたのですが、内心とても緊張していたが、薛参事官や潘書記官はとても人当たりが良かった。日本の家庭教育、学校教育、社会教育という三つの角度からの私の総括は無事終了し、参事官からも彼の娘さんと祥子ちゃんが同じ4歳だという話があり、その笑顔には温かみと愛が感じられた。

今日最後の訪問先は法政大学であった。法政大学のマスコットキャラはオレンジ色のウサギで、このウサギは案内板やミネラルウォーターなど様々なところで見かけるなど、あたたかいキャンパス文化が感じられた。王敏教授の講座は主に「漢字文化圏」をテーマとしたもので、その中には教授の最新研究成果である「日本における大禹」も含まれていた。ある学生から日本文化に関する事物はすでに先人らによって研究されているが、後の世代としてはどのように新たな分野または新たな成果を発見すればいいのかという質問があり、王敏教授からは生活をつぶさに観察し、一つの事柄に集中して研究することで成果が得られるという回答があった。これは私に大きなインスピレーションをもたらすものであった。

実はこの日夜8時以降の自由時間に、私は田口佳織さんと会った。彼女は今年日本の訪中団の一員として中国を訪れ、その後北京へ留学に来たいと思うようになり、その後頻りに連絡をとりあっていた。そのため今回再会できてとても嬉しかった。(今回の「走近日企・感受日本」事業とは関係がないので、これ以上は控えておく)

**日 付： 12月5日 (月) 7日目**

**大学名： 国際関係学院**

**氏 名： 倪話秋**

今日のスケジュールはとても充実していた。まずイトーヨーカ堂の物流工場を訪れた。ここは可能な限り「商品を動かさない」ことをモットーとし、ハンガーに掛けた状態での運送という概念を創り出した。また同時にコンピュータを運用した衣類の自動分類(その後店舗へ運ぶ)を行っていた。工場における技術革新はもちろん重要だが、ハンガーに掛けた状態での運送という概念を産み出したことは非常に驚くべきもので、工場の運営において古いしきたりに拘らず、私たちが見学したトヨタ自動車の元町工場で見えた「よい品よい考」のスローガンのように、従来の方法をさらに突き詰めることで、より良い方法が見つかるのだと思った。

その後私たちは日比谷松本楼で食事をし、さらにこれまでとは別の角度から日中関係の歴史について学んだ。

そして松本楼で感じた思いを胸に暫しの「帰国」となった。中国大使館ではここ数日の感想などについて交流を図り、薛公使参事官の日中関係についてのお話を耳を傾けた。薛公使参事官のお話は私の心を打つもので、日中関係の近年における複雑な事情は、実のところ中国が台頭した後における避けては通れないが制御は可能な対立であり、このしばしの対立を経て、日本の国民は自身の隣国を正視し、また正しく認識でき、中国の国民もまたこれまでの日本を羨むといった態度を改めることができる。双方の社会面での交流が増えるにつれ、両国関係はきっと良い発展が得られ、こうした発展は日中双方にとっても有益で、より良い選択肢である。こうしたお話には私は両国関係をより楽観視できるようになったと同時に、いかに早く対立の時期を終わらせ、両国の国民がより客観的で正しい認識を持てるかについては、私たち若者世代の努力目標だと感じた。

大使館での交流が終わった後、私たちは法政大学で王敏教授による日本文化についての講座を拝聴し、文化の側面から私たちが見学し体験した現象についての解釈や総括がされ、非常に有益であった。

**日 付：12月6日（火）8日目**

**大学名：北京大学**

**氏 名：李静昀**

1ヵ月以上にわたり待ち望んでいた訪日活動も、あっという間に終わってしまった。現在機内にいる私の心の中は、日本そして私たち訪日団との別れの名残惜しさで満たされていた。できるのであれば8日前に時間を戻してほしいくらいである。

今日の午前、私たちはホテルニューオータニのエコ施設を見学した。発電施設、水の再生利用や化学肥料、そしてヒートアイランド現象を防ぐために屋上に作られたローズガーデンなどはいずれも工夫が凝らされていて、多くの施設や技術もまた世界をリードするもので、私は日本の環境保全理念の浸透度合を改めて感じる事ができた。またホテルニューオータニの15階はかつて一時期中国大使館が置かれたことから、同ホテルの素晴らしさがわかる。

お昼は感動的な歓送会が開かれた。ホストファザーと再会できとても身近に感じ、わずか二日間の交流で本当の家族のようになったことに自分でも驚いた。もちろんその理由はホストファザーが私に家族と同じくらいとても良くしてくれたからだと思う。その他別のホストファミリーの幼い兄妹はとても可愛く、皆が彼らに和まされた。このホストファミリーはまた私たちがバスに乗り込む際も見送り、さらに車で二度もバスに追いつき私たちに手を振ってお別れをしてくれた。そして大使夫人のスピーチからは、両国の相互信頼を高め、両国の民間交流を促進し、両国の関係を増進するために、たとえわずかでも自分なりの貢献をしなければいけないという強い責任感が生まれた。

八日間のスケジュールはあっという間に終わり、沢山の収穫や感動が得られたが、ここでは細かくは述べないことにする。中国日本商会そして日中経済協会による、これまで各世代の日中の大学生の相互理解を増進してきたこの活動に心から感謝している。またホストファミリーの私への手厚いもてなしにも感謝している。私としても、今後日中友好のために自分なりの貢献をしたいと思っている。

**日 付：12月6日（火）8日目**

**大学名：北京師範大学**

**氏 名：劉迪**

今日は訪日の最終日で、現在はすでに帰国の機内にいる。

今日の朝、私たちはホテルニューオータニを見学した。一社会のようなホテルという理念の堅持により、ホテルニューオータニでは独自の発電システムや生ごみ処理システムなどを構築し、これらは多くの資源やコストの節約に役立っていた。

私たちにホテルの紹介をしてくれたのは、70歳近いとてもやさしいおじいさんであった。しかし年齢は高いが、彼は若者と同じような元気であった。生活や社会が希望に満ちる時、人々は自分たちの生活を心から楽しむのだと思った。

日本社会とはいったいどのような社会なのだろうか。たとえ仕事や生活のストレスが大きくても、日本の人々はより良い生活のため努力を続けている。日本社会とはこうしたものだと思つた。

**日 付：12月6日（火）8日目**

**大学名：北京理工大学**

**氏 名：居絲薇**

今日は日本での最終日である。

今日はまず私たちが4日間過ごしたホテルニューオータニを見学した。

このホテルの庭には様々なグラデーシヨンの植物があり、そして小さな滝の水がきれいな池に流れ込み、その池に

は沢山の錦鯉が泳いでいるなど素晴らしい景観であった。

ホテルニューオータニについて印象深かったのは、同ホテルが示す信頼であった。中国のホテルでは、傘を借りる時など一般的にルームキーを出し記録をとったり、或いは手付金を支払い担保としたりするが、ここではそうした必要は一切なくホテルのスタッフはそのまま傘を貸してくれる。彼らの示す信頼というものに私たちはとても感銘を受けた。私はこうした信頼は信用を重視する社会環境によるもので、人々が信頼し合い、さらに実際の行動でそれを示すことで、人々には自分が受けた信頼を裏切らないという思いが生まれるのだと思う。中国人はこれまで以上に信用というものを大事にすべきで、そうすることで初めて国際社会に立脚できると思う。

ホテルの見学の後、日本での最後の活動である歓送会となった。多くの学生のホストファミリーが会場に駆けつけ、さらに関連のスポンサー企業の代表者も足を運び、団員全員で『世界に一つだけの花』を中国語と日本語で歌った。

この八日間は短くも充実した時間で、私は日本人との交流や日本文化の体験ができ、さらに日本の友人を一人作ることができたなど生涯記憶に残る体験となった。

**日 付： 12月6日 (火) 8日目**

**大学名： 北京語言大学**

**氏 名： 閔良博**

昨日は今日のスピーチ原稿のため夜中2時まで準備をした。ここに記しておこう。

ホテルニューオータニでの数日の後、最終日のスケジュールは同ホテルのエコ施設の見学から始まった。ホテルのスタッフは同ホテルのエコ化への取り組みとその成果をととても誇りに感じているようであった。彼のその姿は、中国人が高待遇を得たそれと同じようなものがあつた。ホテルニューオータニはまた日中国交正常化のプロセスにおける重要な舞台となった場所の一つである。1972年、双方の国交が回復する際、当時中国駐日大使館はまだ建設されておらず、大使館のスタッフはホテルニューオータニの部屋を借り、当面の間そこで業務を行うなど、当時の困難な時期を同ホテルで過ごした。

今現在、私は北京へ戻る機内でこの文章を書いている。時間は止まることなく流れていく。知らぬ間に今回の訪日の旅も終わった。私は自分の考えをまとめることもままならず、ひいては名残惜しさを顔に出すことすらもできていない。

八日間の訪問ではあつたが、私たちが何倍もの時間をかけて味わい、そして理解すべきものとなった。